

書物の第5編は望遠鏡の歴史に当てられていることを、廣瀬さんは記憶されていたと見え、昨年この本を借用したいとのことであった。早速お送りしたところ、間もなくこの本の返送とともに、「天動説から地動説へ」の著書

を戴いたのであった。

以上のほか、廣瀬さんに纏わる思い出は尽きないが、これで筆を措き、謹んで御生前の御厚誼を謝して、遙かに御冥福をお祈りする次第である。

廣瀬さんのこと

古 在 由 秀

廣瀬秀雄さんは1981年10月27日の夕方、肺炎のため亡くなった。入院中ではあったが、そちらの方は回復に向っていた最中で、病院中でこのようにして亡くなるとは思ってもよらなかった。我々の知っている東京天文台在職中の廣瀬さんは大病をされるということもなかったが、若い頃に当時の例として肺の病気をわずらわれたらしい。その後、医者というものに全くかかれなかった方だが、この若い頃の病気が間接的な死因となったとのことで、普段から養生をしておられたらもっと長生きをされたのにと残念でならない。

我々の知る限りでも非常に物知りの方であった。その知識は各方面にわたり、いわゆる雑学の大家でもあった。私達が東京天文台にいられた頃は、廣瀬さんもあまり忙しいというわけではなく、面白い珍らしい話をいろいろきかせてくれた。そんな楽しい時間も、当時の若先生方が天文の問題で質問にみえて、中断になることが多かった。天文学でも廣瀬さんの専門は多岐にわたっていた。

廣瀬さんは小さい時から天文がすきで、いわゆるアマチュアであった。大学では迷わずに天文学を専攻された。東京大学を昭和7年に卒業されたが、同級生の一人が、緯度観測所におられた服部忠彦さんである。大学を卒業されても職がなく、大学院に入られたが、大学院には5年以上も在学された。今と違って、大学院のための授業などなかった旧制の時代である。

大学院の時代には、東京天文台に来ておられ、神田茂さんと一緒に仕事をしておられ、神田さんの官舎で寝泊りまでされていたらしい。この時代のお仕事は、彗星や小惑星の軌道計算、小惑星の同定などで、また、神田さんの明治前天文学史のための資料集めを、東大の史料編纂所でされていた。

東京天文台に職を得られてからは、及川奥郎氏のもとで、ブラッシャー写真機による小惑星の位置観測に従事された。現在ある天体掃索部の前身が天体写真係である。このブラッシャーで平山信先生や及川氏が小惑星をいくつか発見されたもので、廣瀬さんもこれで観測をするかたわら、小惑星の計算も続けられた。第2次世界大戦後に、廣瀬さんは国際局からいくつかの小惑星の予報の計

算をたのまれ、竹内端夫、石田五郎、高瀬文志郎、北村正利さんなどとこれを担当された。

廣瀬さんの名前が世間で有名になったきっかけは、日本の測地原点での鉛直線偏差の値を、掩蔽の観測から求めた仕事である。その値によって経度緯度を補正して観測地をえらび、日食帯の非常にせまかった1948年5月の礼文島での金環日食が成功したことは、当時多くの新聞でとりあげられた。この値をもっと正確に知ろうと、東京天文台では掩蔽の光電管観測がはじめられた。1P21という光電管がとても高価な時代で、大沢清輝さんとはとより、海野和三郎さんなどもこれに従事しておられた。我々も、この測地利用のための試験観測にかり出され、水路部や国土地理院の人達も一緒に仕事をしていた。これが実用化され、太平洋の島々にまで観測班がおり出されてしばらくして人工衛星があがり、人工衛星が掩蔽にとって代った。

廣瀬さんは、また戦事研究としてシュミット・カメラの研究にかりだされた。廣瀬さんはこり性であったから、この研究を通して光学の大家になられた。岡山の74インチ、36インチなどの建設にあたっての、廣瀬さんの貢献はとても大きい。とくに、岡山や堂平の36インチは、日本ではじめて作られた大きな望遠鏡で、廣瀬さんの存在なくては、その建設にふみきれなかったのではないかとさえ思われる。

東京天文台に計算機を導入することに力をいれられたのも廣瀬さんで、台長時代に実現した。廣瀬さんは計算の達人でもあった。廣瀬さんはいわゆる外国留学というのはされなかったが、昭和35年前後、文部省在外研究員として、アメリカ・シンシナチー大学天文台のハーゲット台長のところに2ヶ月ほど滞在された。ここには小惑星の国際中央局がおかれており、ハーゲット氏と親交をむすばれていたが、ハーゲット氏も8月に亡くなった。廣瀬さんは理学部で軌道論、後には天体力学の講義をされていたが、私は軌道論の講義を受けた。その頃、同じ講義を日曜日にアマチュアの人達をあつめてされており、その講義録がアマチュアの人達によって作られ、広められた。これは名著である。

私事であるが、私は大学卒業後、廣瀬さんが指導教官

となって頂いて大学院生として東京天文台で働くようになった。他に引き受け手がなかったのも、廣瀬さんが東京天文台におられなかったら、私も天文では就職できなかったのである。廣瀬さんにであわなければ、測地学の研究に眼をむけることはなかったろう。

廣瀬さんは私達から見ると非常にユニークな家庭をきずかれ、非常にユニークな3人のお子さんを残された。お子さん達とはよく一緒に遊んでおられた。未亡人やお

嬢さんのお考えで、廣瀬さんの告別式は11月7日、三鷹市の国際キリスト教大学の教会堂で行われ、悪天候にもかかわらず何百人もの人が参列した。

廣瀬さんは勲二等の勲章を受けられることになっており、11月3日には公表されるはずであった。伝達式には自分は出席できないから、私に代りにでてほしいというような廣瀬さんの話が、私達の最後の会話となった。

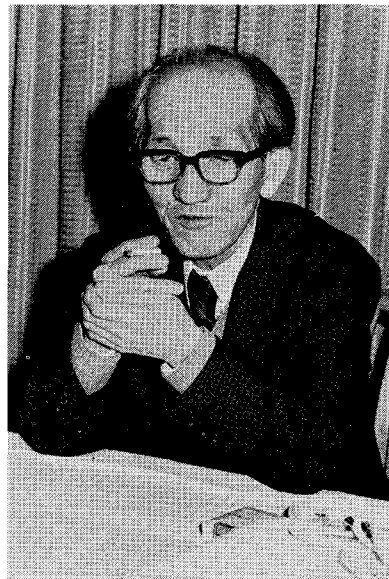
廣瀬先生の思い出

堀 源 一 郎

廣瀬先生がお亡くなりになってから、もう一箇月になる。10月28日に京都で先生の訃報に接したときは、私にはあまりにも突然のことで驚愕した。先生に最後にお目にかかったのは5年前で、それも久々にお会いしたのであったが、その時の先生はお元氣な上に昔と全く変わらないように見受けられたからである。大体、廣瀬先生は昔からお年の割に博覧強気にして老熟の風があったのだが、それにしても、5年前の先生はもっとずっと昔の先生とちっとも変りないように私には思われた。

私はたまたま天体力学を専攻したおかげで、廣瀬先生のもとに博士論文をものすることになった。そして親身の御指導を受けた。先生は博覧強気兼老熟の故にか、頑固一徹にして近より難しという風評もあったかに聞いているが、たしかに頑固一徹であるにしても私にはまことに親しみ易い先生であった。私事に渡るが、6年前に天文の通俗本を著わした折、編集部から推薦文をどなたにお願いするかと尋ねられて、すぐ廣瀬先生が頭に浮かんだ。そして先生は即座に一文を寄せて下さった。

先生の講義は天体力学と軌道論を聴いた。天体力学は種本がモールトンで、特に摂動論の幾何学的(定性的であるが直観的)表現は独特のものであった。当時の筆者は青二才で、(これは若い人に一般的のようだが)数式による完璧な表現の方を好んだのだったが、どちらもわかってしまうと、前者の方に魅力がでてくるのである。筆者も、当時の廣瀬先生くらいの年齢になって、やっとわかってきた。軌道論の方は、やはり種本はあったのだろうが、要するに先生独自に料理された名講義であった。その講義をもっと多くの人々が手に取れるよう本にすることを度々先生に迫ったのであるが、実現に到らなかった。ただ、軌道計算アルゴリズムともいうべきガリ版の小冊子が残っているのは幸いである。なお筆者は聴講の機会を逸したののだが、先生には日本天文学史(江戸時代)の講義もある。その一部がやはりガリ版で小部数が出まわっているようだが、何とか先生の講義を復原したいも



のだ。

筆者は1959年7月から2年余りエール大学に留学したが、渡米した年の暮に廣瀬先生にお目にかかる機会があった。もう20年以上も昔のことで、したがって、先生は今の筆者くらいの年齢であったのかと思うと感慨もひとしおである。たしか筆者がケンブリッジ(ボストン近郊)に出向いて先生とお会いして、当時、在ケンブリッジの古在さんと廣瀬先生とをお連れして(正確にいうと古在さんの車で先生と筆者が連れられて)ニューヘブンまでドライブした。エール大学天文台には未だブラウワー台長が健在で、天体力学のメッカの雰囲気があった。古在さんはエール大学迎賓館に一泊して大いに気分を良くして翌日ケンブリッジに帰り、廣瀬先生はそのまま残って数日ニューヘブンに滞在され、その間筆者がお供をしたと、このように記憶している。そのうちの1日はニューヨークに行ってヘイドンプラネタリウム館を訪れ、また1日は、ニューヘブンからボストンに行く道程の半